1993年12月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
（送料共）

編集／緑の地球ネットワーク
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9－16　西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739（〒552）
郵便振替　大阪4－128465

COM21 通巻316号　発行／COM企画室

緑の地球
GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

●ヒマラヤを緑に／……P 3
●黄土高原からのたより……P 4～5

しごとと遊びが結びつく農村の子供たち（渾源県西留郷）

1993・12
22

緑化本番の黄土高原へ！

ワーキングツアーのお誘い
3月24日出発、ヤオトンの建設も

植林ピークの黄土高原へ、来年3～4月にワーキングツアーを派遣！　今回は渾源県西留郷に、伝統的な建築様式のヤオトン（ドーム型屋根のレンガづくり住居・4室・約80㎡）のGEN宿泊所を建てます。夏のワーキングツアーからここに宿泊します。また大同県徐町郷では郷政府に宿泊して農村の1日をまるごと体験！　往路は天津まで大好評の船の旅です。最高に欲ばった94春のワーキングツアーにぜひご参加ください！

▼スケジュール

1994.3.24　神戸発燕京号で天津へ
3.27～4.4　山西省大同市で活動
4.5　北京市内観光
4.6　北京→大阪（飛行機）

航空便のつごうで帰国が1日早まるかもしれません。

▼主な活動

山西省大同市渾源県・大同県の数か所で植林活動に参加するとともに待望の宿泊所・ヤオトンを建てます。北岳恒山（懸空寺）、雲崗の石窟、万里の長城（宏賜堡）などの観光もおこないます。日本の私たちには想像を絶する黄土高原の風景と人情を満喫できます。

▼定員と締切り

15名。定員に達ししだい締め切りますので、申込みはお早めに。

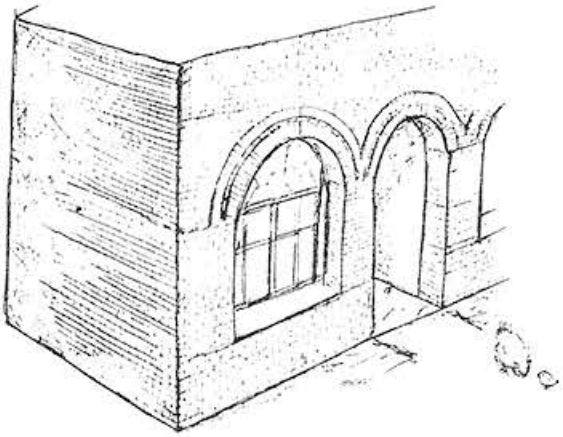
▼費用

20万円（交通費・宿泊費・食費・ビザ料・ヤオトン建設費の一部負担・GEN会費1年分を含む）。船中の昼・夕食は自己負担です。

▼受入れ団体

大同市青年連合会・共青団大同市委員会。

▼申込みは申込金3万円を添えてGEN事務所まで。（☎ 06-583-1719）



西留郷にヤオトンが建つ。現地からのたよりによると基礎工事も順調にすすみ来春の着工を待っています。

GENへ入会してください！
いま一歩の態勢強化のために

GENへの入会と緑化資金、運営資金カンパを11月号でお願いしたところさっそくご協力をいただき、ありがとうございます。

ネパールでの草の根協力開始、GENの体制強化のためにいま緊急に資金を必要としておりますが、経済が低迷するなか、なかなか苦労しております。ひきつづき多くのみなさんのご入会、運営資金、緑化協力資金へのご協力をお願いいたします。

●会費（1口1年分）

一般会員（団体を含む）　12,000円
家族会員（2人めから）　6,000円
学生会員（高校生以上）　3,000円
ジュニア会員（小中学生）　1,000円
賛助会員　100,000円
（以上の会費には会報購読料が含まれています）

●会報購読料

1年分（送料を含む）　2,000円

●緑化協力資金

ネパール、中国黄土高原の緑化協力資金です。あて先を指定されるばあいは明記してください。

●運営資金カンパ

日常活動の強化のためにみなさんのご協力をお願いします。

恒山森林公園・見本園への
種子提供にご協力ください！

見本園の建設に協力することになっている渾源県の恒山国家森林公園から、日本の植物園、研究機関などにあてた種子提供の依頼状をあずかってきました。中国の北方樹種を主体にしますが、あわせて日本など外国の適当と思われる樹種を見本園に導入したいというものです。これまでに環境庁新宿御苑管理事務所、鳥取大学農学部、神戸市立森林植物園などの関係者から協力の返事をいただきました。北海道、東北、長野など寒冷地の樹種がほしいのですが、関西の私たちは足場がよくありません。ネパールの苗場建設がすすめば、こちらでも同様の種子が必要になります。

それらの樹種の種子や情報を提供していただける方がありましたら、ぜひご連絡をお願いいたします。黄土高原には94年3月の緑化協力団が現地にとどけます。

ことしは種子採集の適期をのがしてしまいましたが、来年以降はそのための野外活動などをくりかえし実施しますので、ぜひご参加ください。

求む！中古印刷機

GENの謄写印刷機はもう20歳以上でだいぶ老朽化し、きげんの悪いことが多くて困っています。中古でけっこうですからどなたか軽印刷機をゆずってくださるかたはありませんでしょうか。もしお知り合いのかたでもありましたらお知らせください。

ネパール・ヒマラヤを緑に！

ネパール緑化考察の旅を終えて（その3）

GEN代表世話人　佐　野　茂　樹

6～7月調査行の報告を百分の一もしないうちに、ネパール緑化に直接着手する12月になってしまいました。数年に及ぶ長い準備・調査・構想の段階から、ようやく実行の地点に到達したのです。これまでの関係性の成熟を基礎に、着実に船出をいたします。

ここでは20年にまたがる今後の緑化協力の推進上、この12月にネパールでどのようなことがらをどのように実現していくのか、記すことにします。

サウル村との合意事項

93年6～7月、ネパール訪問の際、ネパール中央北部のムスタン郡サウル村にて、村政府と緑化協力について合意書を交わしました。それは――

1．村の最適地50ロパニ（約 2.5ha）を苗場はじめ植林関係用地として、GENに無償貸与する。期間20年。ここを拠点として付近一帯の緑化事業を始める。目的は水土保全、薪炭・飼料はじめ必要材を充たすこと、防風に役立てること等である。

2．GENは、村の安定（農地、居住地を2～3年に1度の大洪水から守る）にとって欠かせない、村を貫流するタマ川の治水に協力する。

サウル村はアンナプルナ山北西、ダウラギリ直下のヒマラヤの内（北）にあり、標高 2,600m、年中強風の吹きすさぶ乾燥した農村地帯です。過酷な自然条件の中、否応なく侵略する国際商品経済の荒波に負けない、村おこしと結びついた基礎的環境再生（森林再生、水土保全）に、息長く全力投球しようと思います。

生命（いのち）の根源から

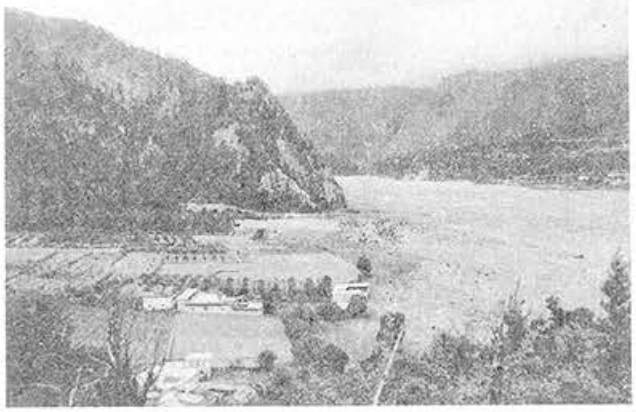
生命を尊ぶことを核心としない緑化などありえないことです。生命をその根源・源泉である環境の再生から育むことこそ環境問題へのとりくみでしょう。遊びがてらにできること、やることではなく、生存をかけた仕事です。

あくまで地域に密着し、地域の事業として、地域の人びとの手になるプランを構想し、実行に移します。巨額資金投入は不必要です。

無償貸与された土地（村での苗場最適地）には、某国際組織が着手した苗場の廃墟の1つがあります。80年代後半、当時のレートで年に1億円を超えるプロジェクトです。カナメは緑化事業が村の人びとの欠かせない生活の一環となるかどうか、そのような仕方で私たちの有効な役割を果たしうるかどうか、です。

苗場と蛇籠（じゃかご）

最初期のプランは次のとおりです。



私たちをまっているネパールのムスタン地方

1の植林用地に関しては、

①試験苗場　30m×30m＝ 900m²を2つ建設。なだらかな傾斜地なので整地の上、木材による土留めを施し、条立てをする。高さ80cm×幅60cmの石垣を延べ30m×4×2＝ 240m分構築する。世界でも有数の常時強風の害を防ぐために不可欠です。

②GENがどっかり腰をすえていっしょに仕事するための事業所兼宿泊所の建設。強風だけでなく、若いヒマラヤ造山地帯で地震多発地なので、それに耐える最低限の強度が必要。

2のタマ川（カリ・ガンダキ河に注ぐ）の治水に関しては、

①タマ川は時に上流の異変によって大土石流が発生し、不安のもとになっている。この流れを矯めるための蛇籠を数か所設置する工事着工。合意書どおり94年4月着工が可能になる段取り。

②前項の新たな合意にもとづいて、94年3月中に鉄線蛇籠用の鉄線、工具その他必要資材の購入・搬入

以上のことがらに関して、93年12月末までにとりきめのため佐野茂樹がサウル入りすることも約束事項です。6月にも村人総員の見守る中で成約したように、資金の受渡しを含め村全体のコンセンサス（合意）の熟成を尊重したいと思います。要するに5月末モンスーン期入り前に、適当な種類の草木の播種・育苗を開始したいのです（このプランについては別に記します）。

当面必要な緑化活動資金

最初の立ち上がり資金はじめ協力活動資金として94年3月までにミニマム以下が必要です。

1．蛇籠資材、とりわけ鉄線

遠隔地ポカラでの調達（馬で5日かかる）運搬費用、製作技術料。おおよその見積もり、完工まで約50万ルピス＝ 125万円

2．苗場と建物及び関連農具（自然の厳しさに負けない頑丈なもの）　建造調達費各 100万円　計 200万円

3．調査、計測（自然及び社会条件の）未定

4．常駐費用または登録されるまでの度々の往復・滞在費。後者の場合2人×3回×20万円として 120万円。以上でおよそ 500万円。

なお、江戸時代以降日本各地の緑化と村（地域）おこしの貴重な経験が世界中で大いに参考になります。そうし

【7ページ3段めにつづく】

広がる黄土高原の緑化協力

がんばる現地からのたより

渾源県・霊丘県の山地は自然環境のたいへん厳しいところです。この地域での緑化協力は、地元の人びとの熱烈な歓迎を受けています。

環境保護をいっしょに

長条村小学校5年　劉　鵬　程

緑の地球ネットワークの親しいおじさん、おばさん、こんにちわ。おしごとはきっとたいへんでしょう。

私は渾源県荊庄郷長条村小学校の5年生で、劉鵬程といいます。渾源県の南山区に生まれました。私のおじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさんは朝早くから暗くなるまでいっしょうけんめい働いているのに、作物はうまく育ちません。山のように高く、大きく、たくさんの食糧をつくって、国家建設を支援したいのに、それができません。私は以前、それがなぜなのかわかりませんでした。いま私はわかりました。おびただしい水土流失がわるさをしているのです。

先日、高見という日本のおじさんがこられたことを先生から聞きました。おじさんは、私たちの植樹造林を応援し、水土流失の状況を変えるためにきたのです。私はとてもうれしくなりました。日本の緑の地球ネットワークのみなさんにとても感謝しています。

よく勉強して、大きくなったら植樹のしかたを学び、生態バランスの知識をえて、環境保護の専門家になりたいと思います。ふるさとの環境保護に役立つだけでなく、日本にもいって、おじさん、おばさんたちといっしょに、人類全体、地球全体の環境保護に役立ちたいと思います。

無私の協力に全村が感激

渾源県長条村村長　劉　源　江

私は山西省渾源県荊庄郷長条村の村長です。私は村民全員を代表して、みなさんがこの村の小学校に〝希望林〟をつくる協力をしてくださることに、心から感謝します。

私たちの村はかなり貧しく、経済的に立ち遅れていて、1人あたりの年収は 200元（1元＝19円）ほどしかありません。全村の 120人の小学生が2つの教室で勉強しています。条件はかなり悪いです。みなさんの無私の援助に全村が感激しています。〝希望林〟ができれば、学校を運営する条件が改善され、人材を養成でき、村にほんとうに〝希望〟がでてくると、みなが言っています。

村の活性化におおいに役立ちます

霊丘県下寨北村の座談会の記録

霊丘県上寨鎮下寨北村で協力事業についての座談会が11月に2回もたれ、「地球環境林をどう思うか？」という小学4、5年生の作文コンクールもありました。以下は、大同市青年連合会から送られてきた懇談会の要旨です。

▼劉記録（村民）：これからの太行山緑化をどうするかってことで、青年団県委員会の葛書記から重点プロジェクトの紹介がいまあったわけだ。この村の小学校に果樹園＝地球環境林をつくるということだけど、それも水土を守り、山河を治めるためのたいせつなことじゃないかな。日本のみなさんからのせっかくの協力資金をたいせつにつかって、太行山の緑化をちゃんとやるべきだと私は思う。いい果樹園をつくって、なんとか水土流失をおさえるようにしたいと思うんだ。

▼李福義（小学校教員）：これからつくる地球環境林は、けっこう早く効果があらわれるんじゃないかな。あそこは河川敷だったところだけど、ちゃんとした畑になりますよ。村の景色もよくなるし、環境の緑化にもつながる。村の人のくらしの向上にもたいへん有利だと思うんです。

▼孟福生（村民）：私はもう50歳だから、この年で学校に通うわけじゃないけど、子どももいるし孫もいる。日本の人たちがせっかく〝希望小学校〟を助けてくれるんだから、私たちも子どもの教育に何倍も努力しなくちゃいけないと思う。腰をちゃんとのばして役にたつ人間をつくりだしたいもんだ。

▼孟令兵（村民）：〝希望小学校〟に果樹園ができるってことは、学校に経

地球環境基金の助成うけ新しく8地点へ

渾源県、霊丘県などの山地部分への協力は、当初からの願いでした。経済条件がきわめて悪く（1人あたりの年収が 100～ 200元の村があります）、生活向上のためにも林業は絶対に必要です。しかもこの地域は、日中戦争にさいして『三光政策』が厳しく展開され、言語に絶する犠牲をだしました。

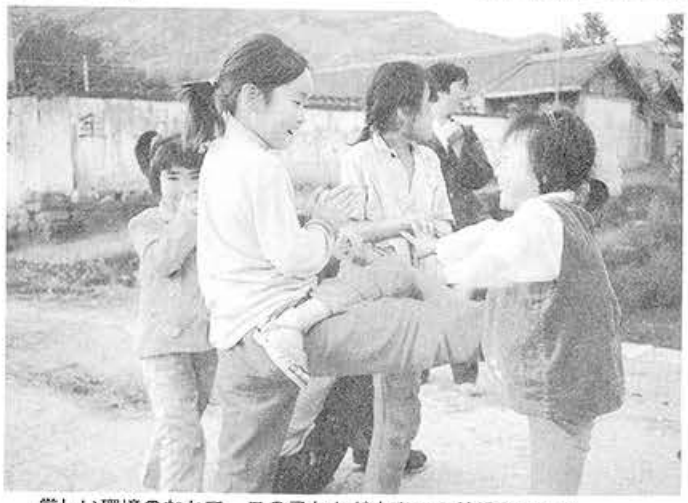
幸い環境事業団の地球環境基金の助成 400万円が決定しましたので、かなりの規模でスタートできます。

①渾源県荊庄郷長条村の小学校果樹園
②同沙圪坨鎮照壁村の小学校果樹園
③霊丘県上寨鎮下寨北村小学校果樹園
④同上寨鎮上寨南村の小学校果樹園
⑤渾源県中庄鋪郷のカラマツ苗畑
⑥同中庄鋪郷老君殿村の地球環境林
⑦霊丘県東河南鎮鍋帽山の地球環境林
⑧霊丘県上寨鎮柳林溝の地球環境林

①～④はとくに困難な村の小学校に果樹園をつくり、リンゴ、アンズ、クルミ、サンショウなどの苗木を贈り、こどもたちに植えてもらって、労賃を就学費用にあてる計画です。別項の手紙のように、地元の人たち、こどもたちの期待は大きく、すでに準備がはじまっています。（合計26ha）

⑥～⑧は合計70haの山の緑化で、長い目でみた環境効果を重視し、カラマツ、ショウジマツ、クロマツのほかにニセアカシア、山ポプラなどを混植しできるだけ多様性をはかります。

済的な後ろ楯ができるってことだよ。そうなったら、学校の運営だってしっかりできるし、この村の発展に役立つ人間がでてくると思うんだ。この村の教育事業にとって、大きなできごとじゃないかな。


厳しい環境のなかで、この子たちが未来への希望をせおう。

▼孟令雲（党員）：この村の小学校に果樹園、地球環境林って名前だそうだけどそれをつくる。いってみりゃあ、それはこの村にとっての〝希望林〟なんじゃないかな。いま〝希望林〟をつくるってことは、この村が貧乏から抜け出して、ちょっとでも豊かになるためのだいじな一歩なんだよ。

▼李福義：この村なんて畑はほとんどないんだから、どんな作物をつくってもたかがしれてる。果樹を植えたら、クルミにしてもサンショウにしても、たとえてみれば金のなる木のようなもんだ。何年かたって実がなるようになったら、自分で食べたっていいし、売りにだして金にしたっていい。貧乏を抜け出して、なんとか衣食に不自由しなくなる、そうなるためのいちばんいい道じゃないかな。

▼杜金香（小学4年生）：一日も早く果樹園ができるといいなってみんな言ってるよ。そういうものができたら、学校で勉強してる私たちの両親も負担が軽くなるし、国にとっても、みんなにとってもとてもいいことでしょ。

▼李福義：いざこの村に地球環境林をつくるとなったら、日本にたいする見方が変わるんじゃないかな。日本軍国主義が以前にこの村にたいへんな災難をもたらしたことは忘れられっこない。でもいまじゃ世界の人たちが平和を願ってるし、日本の人たちも平和を望んでる。日本の人たちがここの環境緑化、地球環境林の建設を助けてくれるってことは平和と友好のシンボルなんだよ。青年団の幹部から聞いたところじゃ、日本から資金をもってくるために、たいへん苦心してくれてるそうだ。みんなから少しずつ寄付を集めるというんだから。この村に協力がくることについては、日本の人たちにしっかり感謝しないといけないと思う。

▼孟午雲（小学4年生）：このあいだ高見おじさんが学校にきて、1人1本ずつボールペンをプレゼントしてくれたんだけど、みんなたいせつに持ってますよ。日本のみなさんの気持ちなんだからって。

▼夏明国（村民）：この村にも日本の人たちがくるそうだけど、そうなったら気持ちよく心から歓迎しようよ。なんどでもこの村にきてくれたらいいじゃないか。地球環境林をつくるってことでは、党員も村民も気持ちをひとつにして、ちゃんと完成するよう協力しあおうよ。この村なんてずーっと貧乏で、立ち遅れてきたんだけど、ちょうどいい機会だから、なんとかそこからぬけだせるよう、みんなで決心しようじゃないの。

▼孟秀麗（小学5年生）：日本の人たちがこの村の植林に協力してくれるなんて、環境をよくするためにも、学校をよくするためにも、こんなすばらしいことはないと思います。私たちだって、ちょっとぐらいつらくたってがまんするし、みんなに負けないよう働いて、がんばって木を植えますよ。果樹園ができたら、木をかわいがって、いっしょうけんめい世話をします。枯らしたりしたら、ほんとにもったいないもの。

▼孟春蘭（小学5年生）：希望小学校ができて、そこに果樹園ができて、明るい広い教室で勉強できるようになったらいいなあ。先生の話をよく聞いて、まじめに勉強して、大きくなったら人の役に立つ人間になるつもりです。自分たちの村なんだから、きれいな、もっといい村にしたいんです。

▼孟令福（党支部書記）：環境林のいいところは、みんなが全部話してくれちゃったな。いいことにめぐりあったんだから、つぎはりっぱにやるってことがたいせつじゃないかな。どんないいことでも、うまくやらなかったら、やっぱり結果はよくないですよ。年寄りも若いもんも、男も女も、幹部も村民も、気持ちをひとつにして、みんなが力いっぱいしごとをしよう。世話してくれてる青年団や日本の人たちにも安心してもらえるように。

地震被害を乗り越えて

渾源県沙圪垯鎮党書記　李　啓　軍
鎮長　高　　敏

1989年、大同―陽高を震源とする大地震に襲われ、この鎮は残酷な自然災害による大きな経済的損失をうけました。日本のみなさんがこの鎮の照壁小学校の〝希望林〟に協力してくださることに、心から感謝いたします。

山村が貧困から抜け出すために緑化は欠かせない。

私たちの鎮は経済的にかなり遅れています。この鎮の学校の条件は普遍的に劣っています。日本のみなさんと、長期に広い範囲で協力しあって、この鎮から人材をたくさん育て、鎮の経済条件を徹底的に改変し、人びとの生活水準を高めることを熱望しています。

先住民族との交流とおして…
堀越由美子さんと楽しい語らい

会場にときならぬお祈りの声と太鼓の音がひびきました。11月13日、堀越由美子さんを囲む会には多彩な顔ぶれが会場いっぱいに集まり、ほんとうに楽しいひとときでした。

先住民族の生き方から学ぶ。

堀越さんが先住民問題にとりくむようになったのはまったくの成り行きだったといいます。まず出産という大事件がありました。新しいいのちをまえにした感動や驚きを大切にして、同じ境遇の母親とネットワークをくみ、講演会を開いたり、助産婦のようなこともしたりする。そのなかで映画の自主上映を手伝うことになり、それがたまたま「ホピの予言」というアメリカ先住民ホピ族に伝わる伝説が現代社会に警告するものを扱った映画だったというわけです。以来、先住民も含めた多くの人と知り合い、はからずもこの問題に取り組むようになったというわけです。問題意識とか理念とかが始めにあったわけではなく、一個人の感動からはじまり、それから人どうしがつながってひとつの運動なりなんなりになる姿はじつに自然で、いいなと感じました。

一連の話のなかでこんな話もありました。あるアイヌの家庭で酒をまじえて歓談しているとき、その父親に、アイヌというのはほんとにいると思うか、と聞かれたので、座りなおしてこう答えたそうです。侵略した側の日本民族の血を引く私がいうのはぶしつけですが、と前置きして、「つごうのよいときだけアイヌになるアイヌの人が多いように見受けられます」。しばらくして、この人わかってる！　と彼の息子が口を開いて、その場はまた打ち解けたそうです。

もし先住民ということを、奪われた民と広く解釈するなら、この言葉はいろんな問題にあてはまるわけで、たしかにつごうのよいときだけ奪われたものになったり、奪ったものになったりする人が多いのかもしれません。けっして人ごとではなく、十分に自分の問題でもあるので、この言葉はたえず突き刺さってきます。（喜多　亮夫）

セイクレッドラン95
ヒロシマ・ナガサキへ！

11月28日、アメリカ・インディアン運動（AIM）創立者の１人で、セイクレッドラン提唱者デニス・バンクスを迎え、日本事務局の準備会議がもたれた。広島、三重、栃木など遠来の人もあり、30名近い参加者で午後１時から夜半まで続いた。被爆50周年を期して日本の北と南からヒロシマ、さらにナガサキに至る大筋が確認された。

大地への祈りをこめランの成功を！

（当ネットワークからは佐野茂樹が参加した。マスコミも多数取材、翌日読売ＴＶで報道された。セイクレッドランについては次号以下に）。

山西省の自然

石原忠一
（92年緑化協力団団長）

⑯高　粱（コーリャン Sorghum bicolor(L)Moench.）

天明の飢饉以来の凶作におそわれた東北地方は、宮沢賢治の「サムサノナツハオロオロアルキ」の実感がつたわってきます。全国の水稲作況指数は、「75」％と戦後最悪となりました。餓死や逃散、そして「米騒動」を経て、戦争中は、米の供出・配給が強制され、「大東亜共栄圏」から食料を輸入しながら農村を荒廃させていった歴史がよみがえります。

11月18日、コメ緊急輸入第一船 7,700トンが、タイから横浜港に入ったという「ニュース」は、山口市で開かれていた〝第25回食と緑・水を守る中央労農市民会議〟に集まった約 2,000人の仲間の表情を硬くさせ、会議を緊張させました。

黄土高原に広がるコーリャンの畑。

戦争中の旧「満州」からの赤褐色の粒々が混じる、配給のコーリャン米を想い出しました。

山西省の比較的地味のよいところが、一面の高粱畑になります。２ｍにもなる直幹に幅ひろい葉をしげらせ、2,000 粒もの５㎜ぐらいの子実の集まった重い穂を支えている姿は壮観です。

もともとアフリカ中部原産で、古代エジプト以来 5,000年の栽培歴をもち、メソポタミア、インドなどを経て、４世紀までには中国に入ったものといわれます。 300種以上の品種がありますが、赤褐色の子実は、搗（つ）いて粒のままや、粉に碾（ひ）いて麺にして重要な食用にするほか、焼酎のような強い蒸留酒をつくります。（コーリャン酒は緑化協力を進めている山西省渾源県の名産です）。

まだ緑のうすい５月に訪問したとき家々の軒下に昨年刈り取った背の高い幹の束が大切に並べてありました。飼料か燃料かとたずねるいとまもなかったのですが……。（和名＝モロコシ）

北海道の森林破壊とアイヌ民族

その後の経過

武田繁典（GEN世話人）

「緑の地球」19号〜21号に連載したレポートにさまざまな反響がありました。福岡で3年ほど前から活動している『アイヌ民族と共に生きるシサムの会』から、いっしょにやりたいとの申し出があり、レポートのほぼ全文をその会の『シサム通信』に掲載して紹介してくれました。

また、この会の木戸さんを通じて、関東に住んでいる故貝澤正さんのお子さんである新井さん、鵜沢さんともお会いすることができました。貝澤耕一さんとは12月初めにお会いする予定になっています。『シサムの会』は、私達にとって活動の大先輩です。いろいろアドバイスを受けながらいっしょにやっていきたいと思います。

岡山で『サバイバル・インターナショナル』の活動をしておられる真実（まさね）さんとは4年前の世界先住民族会議からの知り合いで、全面的な協力の申し出がありました。

東京のサラワク・キャンペーン委員会の松江さんから会報『サラワク・アップデイト』と英文機関紙『MORI NO KOE』にレポートを全文掲載したいとの申し出がありました。もちろん喜んで載せてもらうことにしました。大きな広がりが期待できると思います。

また、緑の地球ネットワークの松山さん、岡田さんが一緒にやることになり、来年1月3〜5日に3人で二風谷（ニぶだに）を訪れることになりました。松山さんは「ともかく、現地へ言ってはだで感じてくることが大切」と言われています。私も冬の北海道は初めて。いまからとても楽しみです。

貝澤耕一さんをはじめ、現地のアイヌ民族の人達とじっくり話し合って、無理のない、着実な第一歩をふみだすための具体的な相談をしてこようと思っています。

この運動の計画にたいする感想、意見、アドバイスなどなんでもどしどしお寄せ下さい。お願いいたします。

お詫びと訂正

まず、レポートの中に掲載させていただきました写真についてですが、20号の1枚、21号の2枚ともフォト・ジャーナリストの西浦宏己さんの提供によるものです。21号でその記載が抜けていましたことをお詫びします。彼とは今年の二風谷フォーラムで知り合いになることができ、いろいろとアドバイスやご協力をいただいています。1984年に『北国の先住者たち・アイヌ、いま。』（新泉社）を出版。この間、アイヌ民族にかかわり続け、この10月には豊中市で写真展も開いています。（豊中市在住）

21号のレポートの、『8．いま一歩をふみだそう』の中に書いた〝アイヌの聖地二風谷〟という表現について、福岡のKさんからアドバイスをいただきました。「この言い方はよく使われるけれども、アイヌ民族にとってアイヌモシリすべてが聖なる土地であり、特に大切な聖域も北海道の各地にあるので、二風谷だけを特別視しない方が良いのではないか」ということでした。

私も、たしかにその通りだと思います。私自身のかかわりの経過と、貝澤正さんの遺志をつぐということで、まず二風谷から始めたいと思っていますが、もしこの運動が少しでも当を得ていて、広く支持されて発展していくなら、北海道の各地に広がって行くものと思います。いかがでしょうか。

したがって、この表現を〝アイヌの聖域のひとつといわれている二風谷〟に訂正したいと思います。

「アイヌ・シサム友好の森」作りをめざそう！

神戸市　林　眞紀

「北海道」とか「アイヌ」という言葉は関西に住む私にとっては、あこがれでありロマンです。今年が「先住民の国際年」ということは知っていましたが、アメリカインディアンとかアボリジニのことなんだろうというくらいの認識しかありませんでした。しかし「北海道の森林破壊とアイヌ民族」を読ませていただき認識をあらたにしました。

森林破壊の問題も、先住民の問題もちゃんと日本国内に存在していたのです。

人間は、長い間その欲望のままに弱者を迫害し、自然環境破壊をくり返し、とうとうかけがえのない地球の存在をおびやかすまでになってしまいました。

夜中も昼間も電気をつけ、車をのりまわし、食べ物があふれる今の日本は、どこまで走っていけるのでしょうか。

武田さんの報告にもありましたように、アイヌの人々のくらしから学ぶ自然と共生した生活こそ21世紀の人間がめざす生活でなくてはならないと思います。〝アイヌ・シサムの森〟作りをとおして自然と共生したアイヌプリの生活を学ばせていただきたいものです。

【3面からつづく】

た研究・調査費用や必要樹種の種子あつめ、自然測候用器材など国内準備費用も欠かせません。物品などを含め、心からの資金カンパをお願いする次第です。

草の根から草の根へ！

ヒマラヤを緑に！

では12月16日に旅立ちます。進行状況は、通信可能な地点にいるかぎり克明にお伝えします。

〝じゃなかしゃば〟（今のようではない世の中——水俣の人々のことば）への希望をもって。

追記：ネパール調査や今後の展望について、くわしい記述を月刊「翔（かけ）る」に掲載中です。ぜひ、ご一読を！

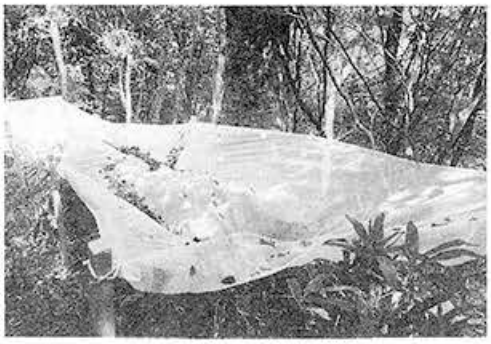
（連絡先 03-3987-7155）

ブナの木の想い出

伊丹市　岸　本　　宏

1950年代の後半、私は東北地方で木材を集荷する仕事に従事していた。取り扱う樹種もその用途・仕向先も多岐にわたっていたが、量的にはブナと赤松が多かった。ブナの集荷地の１つは栗駒山(1,628m、宮城・岩手・秋田３県の境界）の周辺だった。

宮城県側の中腹の高原に旧「満州」から引き揚げてきた10家族余りが入植し、平坦地を開墾し農耕に取り組んでいた。冬になると国有林から払い下げを受けたブナの林を伐採し、太い丸太は一般用材に、細いものはパルプ材や薪炭材にしていた。さして広くない開拓地から収穫できるのは貧弱な粟・大豆・ピーナツの類でしかないので、開拓の家族の現金収入はブナに依存せざるをえなかった。板張りトタンぶきの家に行くといつもお茶うけに殻付きの小さなピーナツが出された。そこから見渡すと栗駒山の中腹は美しいブナの樹林に覆われていた。いまブナ林のあとはおそらく杉の植林地に変わっているであろう。あの人達はあそこに定住できなかったと伝え聞いた。旧「満州」と栗駒、２度の辛酸を思うと胸が痛む。


シートを張ってブナの種を集める。

あの頃、ブナのことを地球環境保全や水資源と関連づけて論ずる人は誰もいなかった。あれから長い年月が過ぎ、世の中は変わった。雑木と呼ばれ軽んじられていたブナその他広葉樹の重要性が見直され、対策が検討されるようになった。手放しで喜べないとしても一歩前進といえよう。

それにしてもブナの樹林は美しい。新緑、秋の色づき、冬空に突きささる精細な梢、灰色の地肌に白い斑点を散らした太い幹。山でブナに出くわすとなんとなく安堵する。そしていろいろ想い出させたり考えさせてくれる。

ＧＥＮが恒山森林公園の見本園で、日本のブナも育ててみたいとのこと。素晴らしいことだと思う。よい結果がでるように、ぜひ成功するようにと願っている。

有機農業と本野一郎さん

新著の発行にさいして

相　川　康　子　（新聞記者）

環境や自然保護について話す時「昔は良かった」を連発する人がいて、原体験のない若造としては、ついていけない思いをすることがある。同様に「有機農業」も、理念に敬服しつつも、都会育ちな上に、共働きで共同購入グループに入る時間的余裕のない私には、どこか遠い世界のことだった。

この本の著者である本野氏に会うまでは――。

「ねえ、本野さん。婦人雑誌とかで話題になっている『残留農薬を消す調理の工夫』をどう思います？」

「口に入る直前に落とすだけじゃ、毎日農薬に身をさらしている百姓は救われない。ちょうど浄水器をつければ水源保護への関心が薄れる、というのと同じ危うさがあるね」

「安全」や「本物ＶＳ偽物」にだけ目が向いていた私にとって、農協という様々な矛盾を抱えた組織の中で実践を積み重ねてきた、本野氏の言葉はズシリと響いた。その後何度か、杯を酌み交わしながら話す機会があったが、いつもその思想の深さや運動論の確かさ、包容力に驚かされる。

例えば、米自由化に反対するにも、その根拠を「お米文化」には求めず、水田が富の蓄積や支配―被支配の構造を作る基盤になったことに鋭くメスを入れ、米至上主義でなく、麦やヒエを交えた多元的な価値観を提示する。

ノスタルジーやあがないだけでは、運動は長続きしない。本野氏はこの本の中で、労働の質の見直し、人と人―特にアジアとの草の根のつながり、さらに「お金文化」から抜け出す契機にまでつながる、有機農業の可能性を示してくれた。その夢を与えてくれたことに感謝したい。

・発行　新泉社
・著者　本野一郎
・書名「有機農業の可能性――暮らしをつくる、お米とアジアと自然から」
・定価　2,060円

ネパールでの研修に出発する
東間徹さんの壮行会開かれる

ネパール・ムスタン地方の農村での１年間の農業研修に旅立つＧＥＮ世話人、東間徹さんの壮行会を11月19日、大阪市西成区のユニオンズハウスで開きました。

今回の研修は東間さん自身の発案。

「ＧＥＮはネパール緑化協力に着手しますが、本格的な活動を行う前に現地で学ばなければならないことがある」との思いからです。研修先はネパールムスタン地域開発協力協会（近藤亨代表）の経営するシャン農場。来年12月までの１年間の予定で、現地の人たちと一緒に、ネパールの農業を一から学びます。

壮行会にはＧＥＮ会員ら約10人が参加。仕事と準備で忙しく前日ほぼ徹夜した東間さんが酒に酔っぱらって寝てしまうなか、鍋をつつきました。

東間さんは12月９日、大阪空港を出発、香港経由で現地入りします。これが届くころにはネパールで土にまみれているでしょう。東間さん、頑張れ！（岡田）